

# 国家存立の前提要件としての民族と土地

大 橋 松 行

## はじめに

民族とは何か。これは古くて新しい命題であり、特に政治的社会あるいは国家との関連においては、実に今日の課題でもある。今日の国際社会の情勢を一瞥してみても、このことは容易に理解しうるのであって、今世紀における二度の世界大戦を契機として巻き起こった民族自決主義の諸潮流は、とりわけ発展途上諸国において著しいものがある。これらの国家においては、あたかも民族と国家的全体が一枚岩的かつ有機的に結合し、まさにエネルギーな一個の生命体のごとく作動している観を呈している。しかし、このような現象は、近代的民族に特有のものであり、前近代的民族にはうかがわれなかった現象である。このことは前近代的民族と近代的民族との間に厳密に区別すべき質的な相違（この場合、特に民族意識の発達と未発達がその大きな指標となる）が存在することを意味するのであって、それは歴史的発展に伴う社会進化のしからしめるところであると考えられる。

では両者はどこに相違点をもっているのであろうか。このことを考察するにあたって、まず一般に民族が概念的に人種や種族と同義ではないということを認識しておく必要があろう。

## 一 人種・種族・民族

人種 (race) は、辞書的には「皮膚・毛髪・目の色・鼻・目・唇・顔の輪郭・頭の形・身長・体格などの身体形質の特色をもととして区別されたもの」<sup>①</sup>、すなわち「言語・慣習・国籍のいかんを問わず、共通の遺伝的身性の諸特徴の全体を示す人の自然的群」<sup>②</sup>として、人類学的な観点から定義されている。

また種族 (ethnic group) は、「一般的には、同一の人種的・文化的系統に所属する人たち (言語・宗教・慣習・道徳を共通にし、同一の祖先に由来するという信念に基づく集団)」<sup>③</sup>を指し、家族や氏族の血縁関係 (そこに濃淡の別は存在するが) にある人々を構成員とするものであって、その意味では、それらの上位集団ではあるが、それ自身また民族の下位集団としての位置にあるといえる。なぜなら、民族 (nation) は、一般に「血縁や地縁のうえに成立する、経済・政治・文化など多方面にわたる生活の共同や歴史的運命の共同、およびそれに伴う共通の心理状態を特色とする包括的な基礎集団」<sup>④</sup>と理解しうるからである。

高田保馬氏は、この人種・種族・民族の関係を次のように述べておられる。「此概念 (＝人種) はただ身体的・血液的、従って自然のことを意味して、文化・伝統等の社会的方面を含むものではない。また種族 (或は部族 Stamm) といふのは、必ずしも自然的の側面のみを意味するのではない。それは血縁によつてつながるものの集団といふ社会的乃至文化的方面をも含んでゐる。けれどもそれが民族とことなるところは、その全範囲だけを限る共同生活を求めようとする集団とは必ずしも云ひがたき点である。それは普通にいくつかの民族又は血族団体を単位とする集団として、民族の内部に包括せらるるのを常とする」<sup>⑤</sup>。この三者の包摂的な関連づけは至当なものと思われる。

このように人種・種族・民族は、概念上その定義を異にするのであるが（このことは民族の科学的認識において重要である）、これが恣意的に同一視せられ、さらには政治的にまで利用せられて、他民族を極度に圧迫・迫害し、当該民族を悲惨な状態に陥れた実例は実に多い。ナチス・ドイツにおけるユダヤ人（民族）の大量虐殺をはじめ、戦前の天皇制絶対主義体制下の日本における植民地民族（特に朝鮮人・中国人）に対するがごときは、その典型を示すものであって、その縮刷版にいたっては古今東西枚挙にいとまがない。

このような現象が発現するのは、人種そのものに原因があるのではなくて、人種に対する意識的操作・作用の帰結たる人種信仰に問題があるからである。すなわち、自己の所属する人種に対して優越意識をもち、それを極限にまで高揚せしめるとともに、他人種に対しては故意に下等意識を抱き、抱かしめ、それを蔑視して、殊更に敵愾心を煽り、ついには何らかの形態において対立、闘争関係にいたらしめる。それはまさに政治的判断の介在した国家的行為の所産である。つまるところ、人種信仰は、外政的には、国際社会あるいは国際関係におけるリーダーシップ獲得の正当づけのために利用され、他方において、「内政的にはほとんど例外なく、現在の階級支配を正当づけるために利用されている」<sup>⑥</sup>のであって、こういった類の人種信仰は、国内的レベルでの国民的文化共同体と政治的民族統一の完全破壊を惹起し、国際的（地球的といってもいいが）には、それは「人種の混合体である民族の歴史的能力を消滅させることによって戦慄すべき意味における『無歴史的存在』への転回」<sup>⑦</sup>を惹起するであろう。

① 『哲学事典』平凡社、一九七一年、一三六一頁。

② 浜島朗・竹内郁郎・石川晃弘編『社会学小辞典』有斐閣、一九七七年、二〇六頁。

③ 浜島朗他編、前掲書、一八七頁。

④ 浜島朗他編、前掲書、三七〇頁。

⑤ 高田保馬著『民族論』岩波書店、一九四二年、四〇五頁。

⑥ Hermann Heller, Staatslehre, Herausgegeben von Gerhart Niemeyer, Leiden 1934. A. W. Sijthoff's Uitgeverij aanschappij N.V. (ヘルマン・ヘラー著、安世舟訳『国家学』未来社、一九七一年、二二三頁。)

⑦ H・ヘラー、前掲書、二二三頁。

## 二 民族の二面性

民族は大きく二つの側面、すなわち「自然形成体」としての民族の側面と、「文化形成体」としての民族の側面とを有している。自然的側面からみた場合、民族は自然的生殖によって保持される人口である。この人口は土地とともに国家存立の前提すなわち必要条件として「国家の予備的所与」の地位を占め、「国家的集団にその『第一質料』を与える」<sup>⑧</sup>ものとして理解しうる。この場合、民族は、下位集団としての人種や種族を包摂する集団であり、国家との関連においては、まさしくその可視的基礎集団を意味する。

他方、文化形成体としての民族は、自然的側面を基盤として、経済・政治・文化・道徳・規範など多方面における人間的社会的生活の共同、あるいは歴史的運命の共同およびそれに伴う共通の心理作用ならびに精神状態を有する包括的（可視＋不可視）な基礎集団を意味する。自然形成体としての民族と文化形成体としての民族は、その時間的空間において前者は後者に先行し、後者は前者を前提として形成せられるものであつて、前者だけでは真の意味の民族とはいえない。特に後者が顕現するのは、近代国家が成立してのちであり、未開社会においてはうかがい知ることではない。そこには運命共同体としての同類意識あるいは民族意識が未発達のみであり、その萌芽的状态が全く不確定的に民族の下位集団の間に散見できるのみである。以上、民族は大きく二つの側面を有するのであるが、これを踏まえて民族の本質にアプローチしてみよう。

⑧ Jean Dabin, *L'Etat ou le politique—Essai d'une définition—* 1959. Paris, Dalloz. (ジャン・ダバン著、水波朗訳『国家とは何か』——「政治的なもの」の探究——創文社、一九七五年、二三頁)

### 三 民族に関する諸見解

スターリン (Iosif Vissarionovich Stalin) は民族を次のように定義している。「民族とは、言語の共通性、地域の共通性、経済生活の共通性、および民族文化の個有な特質の共通性のうちにあらわれる心理状態の共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された人びとの堅固な共同体である」。そして、「資本主義以前の時代には民族はなかった……。というのは、まだ民族的市場もなく、民族的な経済的中心地も文化的中心地もなく、したがってその人民の経済的細分状態をなくして、これまでばらばらであったこの人民の各部分を民族的な全一体に結合する諸要因がなかったからである」。民族の「潜在的可能性は、民族市場を経済的および文化的中心地をもった資本主義の興隆期にはじめて、現実性に転化したのである」<sup>⑨</sup>。

この定義は、そこに政治的な要素を全く欠いているがために不十分なものである。そして、このスターリンの見解からは決して次のような論理的展開はなされない。すなわち、「共同の地域・同一の種族・共同の言語・宗教・風俗・習慣・性格・文化・共同の歴史的運命などの客観的な条件がととのったときに、即時的・無自覚的な民族が形成される。そのうえに同一の民族に属しているという意識および連帯の意識などの主観的条件をそなえたときに、現実的、自覚的の民族が成立する」<sup>⑩</sup>。「同一の民族に属しているという意識および連帯の意識」すなわち共属意識・民族意識が形成されるのは、「客観的条件」のうえに政治的要因が付加され、それが何らかの形で共同体に作用し、同時に共同体が作用を受けるためであって、この要因が欠落した場合には決して共属意識・民族意識は生ま

れてこない。

民族に関する他の見解をみてみよう。

中島重氏は「民族 (nation) とは、大体に於て言語・文化・宗教・風俗・慣習等を同一にし、経済生活上の最大範圍を爲し、同一土地に永く共在して、地理的歴史的に運命を共同にし、互ひに一体なりとの意識の下に現出せられて居る情意的・生命的全人格的結合体である。……。民族は大体に於て近似の人種に依りて構成せられて居るものなれども、必ずしも厳密に言ふことを得ざるものであつて、純粹なる一人種に依りて構成せられて居る民族なるものは存在しないのである。故に民族は血縁社会であるよりも、地縁社会であり、地理的歴史的な運命共同体であり、又同一政權に服従し来りし來歴を持つ政治的共同体であり、又同一文化伝統を持つ共同体であるといふやうな方面から理解せらるべきものであ<sup>⑪</sup>る」とされる。そして、「民族なる結合体<sup>⑫</sup>に於ては、結合關係が優位して根本の關係となつて居るが、勿論上述の如き鬭争關係、權力關係、利用關係等が存在して居る。此等の非結合關係の混在にも拘らず、全体として根本を爲すものは、結合關係であり、連帶關係であるが故に、共同社会 (Community, Gemeinschaft) といふのである。しかし民族が共同社会と言はるはなほ他の属性に依るのである。即ち、民族は、結合關係優位の社会であると同時に、非組織的基礎社会なるが故である。非組織的とは、国家の如く職能や仕事の爲に、人の意思と意思が協働し協力するやうな固定的仕組や機構なるもの無く、ただ人と人とが相互並列的に人格的・生命的接觸に依りて成立せしめて居る社会の謂であり、基礎社会とは国家の如き組織団体を派生成立せしめて居る基礎たる社会なるの謂である<sup>⑬</sup>」。民族は「厳密には全体共同社会であつて、全体社会の基礎を爲す所のものである<sup>⑭</sup>」と述べておられる。

中島氏の見解には全体として首肯すべき点が多いが、ただ民族を「共同体」あるいは「社会」と全く同義的に観念せられているのならば、いささか問題である。確かに「人間の集合体」という意味において、また民族が一種の部分社会たる点においては民族も共同体も社会も全体社会に対して同一の基盤のうえにある。しかし共同体や社会は民族そのものをその存立の前提要件として形成されるものであり、また民族は共同体や社会を一つの契機として、それ自身の歴史的進展をとげるのである（近代民族の形成へと）。したがって、厳格には民族は共同体あるいは社会と同義ではないが、しかしこれらが非常に密接な関係にあることは理解しうる。

高田保馬氏は、「民族は伝統に基き過去に基く集団である。此集団が更に進みて其集団的勢力要求によって結束を加へるとき近代民族となる。いはば、民族の自衛を求め民族の優越を求めるといふ理想又は目標の共同的なる追求によって、団結を強め能動的態度をとるときに、近代民族が成立する。過去によって統一を保つところの民族がその上、将来によって統一を加ふるとき近代民族がある」<sup>⑭</sup>と近代民族を定義づけられ、「民族もまた、畢竟一の部分社会に過ぎず、ただ部分社会のうちの特に重要な意義をもつもの、生活の極めて広汎なる範圍に亘れるものといふに過ぎぬと思ふ」<sup>⑮</sup>と述べておられる。高田氏の見解もその根本において中島氏の見解と大差はないように思われる。つまり両氏は民族を全体社会の基礎をなす重要な要件としてとらえ、民族の動的側面、プラス的要因を積極的・肯定的にとらえて、それを民族のもつ特質としておられるように思われる。

両氏はその学説において多元的国家論の立場に立つておられるが、マルクス主義的な階級国家論の立場からは、民族はどのように定義されているのであろうか。それを田畑忍氏によってみてみたい。

田畑氏は、次のように民族を定義づけておられる。「民族は、根源的社会たる原始共同社会（群・種族・氏族・部族）が、階級的分化と征服過程とを契機とした発展段階を辿って到達したる政治的社会であり、国家的社会である。」「それは地縁的社会であるから、土地（領土）の共同性にこれを求めなければならない。またそれは階級権力的社会であるから、階級権力的の共同性にこれを求めなければならない。要するに民族の社会的本質は、階級・政治・法・国家的諸關係に着眼して決定しなければならない、と言うことである。風俗・伝統の共同性や、言語の共同性や、宗教の共同性やその他の文化の共同性だけでは、種族等と民族との相異を混乱せしめる。」「人類の最初の文明的社会たる民族社会は、言うまでもなく政治社会または国家的社会として、そして階級的社会としての古代の奴隸制的国家社会にはかならない。」<sup>⑩</sup>そして「ただ近代国家の基盤たる近代的民族は、それ以前の時代の民族が、牧畜のおよび農業的民族として、未発達かつ不完全民族であったのに対して、発達せる商品経済または資本主義経済をその基盤として有していると言うこと、民族意識をもっていると言う点とで異っている」と<sup>⑪</sup>近代的民族の特質を述べておられる。

この見解は、民族のもつマイナス要因にも着眼したものであり、特に民族を分裂契機を内包した階級分化、および征服過程の帰結たる階級権力的社会として理解されており、そのため血縁の共同をはじめ、伝統の共同や共通の過去に基づく民族の統一志向を軽視しておられるように思われる。しかし、近代国家が極めて表相的ではあれ、現実には階級国家として現出したことは認識せられるのであって、この点からすれば田畑氏の見解も充分に首肯せられるものである。

⑨ スターリン著『民族問題とレーニン主義』国民文庫。

⑩ 杉江栄一・太田雅夫著『政治学ノート』法律文化社、一九六六年、二五頁。



- ⑪ 中島重著『国家原論』三笠書房、一九四一年、一一五～一二六頁。
- ⑫ 中島重、前掲書、一一七～一二八頁。
- ⑬ 中島重、前掲書、一一八頁。
- ⑭ 高田保馬、前掲書、一三頁。
- ⑮ 高田保馬、前掲書、二八頁。
- ⑯ 田畑忍著『政治学』全訂版、ミネルヴァ書房、一九六六年、七一頁。
- ⑰ 田畑忍、前掲書、七二頁。

#### 四 民族形成の基盤

民族は本質的に血縁的共同と地縁的共同、さらにはそれから派生する諸々の共同を基盤として形成された政治的社会集団であるとともに文化集団でもある。特に共同の血縁という客観的要素は、今日においては事実、そのものとはいいがたく、多分に擬制的なものを含んでいるが、われわれの祖先は同一であるという意識・觀念が陽性的帰結としての親和・結合・結束に対して、また陰性的帰結としての敵対・闘争・分裂において重要な意義を有していることは否定できないであろう。その場合、陽性的帰結の方が陰性的帰結に優位して、民族なる集団の根本関係となつてゐることは勿論のことである。血縁の共同のみならず客観的諸要素（他に文化の共同、運命の共同等が挙げられる）は、すべて「伝統の共同、共通の過去」の分析結果であつて、このことから、これらが「生きて現在の結合を作り上げるところに民族の客観的側面があり、」⑮「此結合が意識せらるるところに民族意識又は民族の拡充を求むる意識といふものが成り立つ」⑯のであると一面においては言えるであろう。

このような共属意識・民族意識は歴史的変遷過程のなかで生まれ、培われ、潜在的に個々の人間に存在しつづけ

て、近代国家の形成を契機として発現し、顕在化したのである。つまり「民族も、作用し、作用を受ける現実であり、そして民族の共属性は、精神的な伝統連関によって刻印づけられた存在がこの連関を自己の中に生き生きと現実化することによって生み出されるのである」<sup>⑮</sup>。

他方、地縁の共同は、一般には事実としての民族そのものの存立の物質的前提要件として存するのであるが、民族意識の発揚においても一定の地理的空間の確保ならびにある程度の有機的結合が必要である。一定の時間的空間を伴った居住地域の共同は、民族結合（意識面においても実体面においても）の助長的因子としての役割の一端になつていと観念できる。しかし、その地縁の範囲については自然的というよりむしろ人為的要因によつて決定せられるものである。

⑮ 高田保馬、前掲書、四頁。

⑯ H・ヘラー、前掲書、二三九頁。

## 五 民族 とは

ここで、学説において立場を異にする諸氏の諸見解をふまえて、一応、筆者なりに民族の定義づけを試みてみたいと思う。すなわち、民族は血縁の共同（その多くは擬制にすぎないが）、地縁の共同を基体として、そこから派生する諸々の共同（経済生活の共同、言語・宗教・風俗・文化・慣習等の共同）を、すなわち伝統の共同、および共通の過去を程度の差はあれ大体において同じくする人々の集団あるいは集合体であつて、それが政治的諸要因の作用によつて、歴史的変遷過程において多方面にわたる生活の共同や歴史的運命の共同を誘因し、それに伴つて起こる心理的・精神的状態を何らかの形・程度において共有する、狭義の意味での包括的な基礎集団であるとともに、

それはまた、一面において非組織的基礎社会でもある。そしてこれらを基礎要件として、あるときには自然発生的に、またあるときには政治的配慮から操作的・人為的に民族意識・共属意識が発揚せられ、それが陽性的には自民族への親和感情ないし帰属意識、それから帰結する民族の対内的・対外的結束・結合、さらには政治的統一という形において、また陰性的には他民族への対立感情、それから帰結する民族の対内的・対外的闘争・分裂、さらには民族の消滅という形において現象してきたのである。

このように近代民族は、民族意識において二面性を有するのであるが、いずれも政治的意志共同体としての「国民」を形成している点において共通項を有し、その意味ではともかくも自覚的・現実的な民族であると言える。民族はその初発においては多分に無自覚的・即自的な民族として存在したが、歴史の流れにしたがって、民族内部あるいは民族間において、継続的かつ発展的な同化作用や分化作用が働いて漸次進化し、近代国家すなわち民族国家成立にいたって民族意識を媒介に国民として現出した。しかし、近代国家が階級国家として、すなわち資本主義国家として多く現出したため、そこに資本主義商品経済にもとづく階級分化の現実是否定しがたく、したがって一面においては、近代民族は階級権力的社会を形成していると言える。だが、われわれの祖先は同一であるという意識・觀念が、とりわけ対外的には国民としての一体性を保持していることも事実であり、また理念として内外における統合、統制を本質的に志向しているということも全面的には否定できないであろう。結局、近代民族は大きなジレンマのなかに形成された歴史的所産であると言える。

## 六 近代民族の形成過程

近代民族は近代国家の所産であるという意味では、近代国家の成立が近代民族の形成に先行することになる。し

かしこのことは、近代国家成立と同時に近代民族が突如として現出したということを意味するものではない。近代民族が形成せられるには、前近代という一連の歴史的流れのなかで、単なる時間的・空間的集合体としての現実在に共同目的の保有および組織化という一連の社会行為の萌芽的行為が持続的に発展・保持せられて、民族意識の高揚とともに民族の結合が促進され、やがて民族共同体が形成されて、ここに「民族的統一」が結晶するのである。この民族的統一を基軸として近代国家が成立し、そうして、成立した近代国家によって操作的・人為的に近代民族が形成せられるのである。しかし、このことは自然的要因を全く排斥するというわけではない。なぜなら自然的要因をも含めた客観的要因を基盤にして、そこに政治的統合意識が操作的に導入されて、近代民族として創出せしめられているからである。

近代民族は前近代的民族の歴史的形態の性格を継続的に保有しているのである。それは個々の民族成員がそれぞれに過去の歴史を継承し、それぞれの形において民族形成に関与してきたのであり、また、してきているのである。つまり、「成員の上に、そして成員の外に、民族は存在しないのである。しかし、民族成員がその環境の変化する諸条件の下で民族を形成することができるのは、歴史的に変化する民族連関がこれらの民族成員の中に作用するためであり、そして作用する限りである」。そして、「民族的特質は歴史の流れの中にあつて周囲の自然と文化に対する同化と独自性の主張とを継続的に繰り返すことによつてのみ成立するものなのである」<sup>(20)</sup>。言葉を変えていえば、「近代の集団の主体としての民族は、過去の封鎖的な前近代的集団の正統の継承者である」といえる。このようにして近代民族は形成せられたのであり、現に形成せられているのである。

<sup>(20)</sup> H・ヘラー、前掲書、二四一頁。

<sup>(21)</sup> 清水幾太郎著『社会学講義』岩波書店、一九五〇年、二八三頁。

## 七 民族国家と国民

前述のように一連の歴史過程を経て、近代国家すなわち民族国家が成立し、それに随伴して民族は近代民族として形成され、やがて国民として、再構成されてくるのである。<sup>②</sup>

では事実としての、現実としての民族を国民として再構成せしめた契機は何であらうか。民族はその成員の全体を包含するかぎりでは個々の成員を超越する。だが民族は、いくつかの共通の民族性を保有した、相互に相類した多数の人間の集団であるが、これだけでは国民として新しい社会的存在とはなりえない。それが新しい存在となるには、集団が一定の目的志向的集団（その目的は相対的で観念的なものであるが）として結集しており、個人的目的とは区別された、しかし、それを基盤とした共通の社会目的を有することが、少なくとも一つの条件とならう。だがこの共通目的は、人格としての個々人を必ずしも全体的包括的に統一せしめるものではない。なぜなら、この類の共通目的は、国家を構成するすべての人間の統一的目的であるというよりは、むしろしばしば当該構成員の一部、すなわち階級的な社会集団、特に階級的支配者集団での共通目的であるからである。

このように何らかの程度、何らかの形態において有する「共通目的」なるもののもとに民族が組織化されて、統一的組織体として機能するとき、ここに国民が形成されるのである。それには共属意識・民族意識が一つの政治的意志連関へと発展するということが必須条件となる。つまり、「ある民族がその特質を相対的に統一的な政治的意志によって保持し、かつ広めようと努める時初めて……、国民と言えるのである」<sup>③</sup>。そして、「ある民族がその独自の意識とともに自己と他民族との相違の意識を共同的感情と『われわれ』意識にまで発達させる度合が強ければ強いほど、それだけ一層、それは『民族共同体』となり、そして政治的なものの領域においては国民となる可

能性が強まるのである。<sup>24)</sup>

「共通目的」、共属意識・民族意識、政治的意志、組織化、そして機能および行動という一連の有機的連関によって民族は国民となるのである。もとより、国民は単に民族の総和でも総計でもなく、それ以上のものであるが、民族は政治的統一組織体としての国民にとって基礎要件である。国民は、多くは多数民族の政治的集合体であつて、決して民族の精神的結合体や統一体ではない。なぜならば国民の現実、通常、内部的に政治的意志方向の多元性を示しているからである。その顕著な実例は今日の階級国家・階級社会においてうかがい知ることができる。そして人間は生まれながらにして国民ではなく、前述の一連関的操作によって、つまり意味づけられて国民となるのである。

② このような見解をもつ先学諸氏は多い。清水幾太郎氏は「即ち国家はその内容として民族を有している。固より民族は国家的形式を得ることによって謂はば完成に到達するものであるが、民族はこの形式の獲得を俟つて初めて集団たり得たのでなく、寧ろその以前に於いて既に集団であつたのであり、政治的自覚によって国家として実現せられたのである。多くの個人は言語・文化・信仰・慣習・経済の諸領域に亘つて幾多の共通の紐帯を以つて結ばれて一の民族をなしたのであり、国家的形式はかかる集団の政治的自覚によって獲得されたものである。民族は近代的な規模及び段階に於ける集団の主体である」(『社会学講義』二八〇～二八一頁)と述べておられる。

高田保馬氏は「要するに国家の組織は相互の接触を通して、又国家への共同なる従属を通して、そこに血液の混和、共同なる文化、及び共同なる運命を作り上げ、そのことによってその所属成員、いはば形式なる国民を打つて一の民族にまで鑄造する」(『民族論』三八頁)。「かくて国家は民族を作る。殆んどすべての民族は——国家形成以前の段階にある低級の民族を除いて云へば——国家によって形成せられたものである」(『民族論』三九頁)と述べておられる。

H・ヘラーは次のように述べている。「資本主義の発達した時代になつてようやく、諸民族は各々自らを国民に形成していった」。(『国家学』二四一頁)「民族と国民のどちらも、国家的統一の成立以前に存在し、かつそれを自動的に創設する、

国家存立の前提要件としての民族と土地

いわば自然的統一体とみなしてはならないのである。逆に、……、民族と国民という『自然的』統一体を初めて作り上げるものは、あまりにもしばしば国家的統一体なのである。国家は、その権力手段をもって、自ら、言語的・人類学的に相異なる諸民族を一つの民族に作り上げることがまったく可能なのである。』(『国家学』二四五頁)

また、J・ダバンは「民族が常に国家に先んじて存在した、というのではない。反対にしばしば、民族をつくりあげたのは国家である」(『国家とは何か』三八頁)と述べている。

このようにイデオロギー的相違によって、表現的に若干の差違はあっても、等しく近代民族・国民が近代国家によって形成せられたということにおいては、大旨その立場を一にしている。

②③ H・ヘラー、前掲書、二四〇頁。

②④ H・ヘラー、前掲書、二四〇頁。

## 八 民族と階級

最後に、民族あるいは民族的社会と階級(Klasse)との関係について若干触れておかねばならない。なぜなら国家を構成する基礎集団としての民族(それが単一民族あるいは複数民族から成るにしても)は、必ずしもその政治的意志方向や将来の目標において、統一していないからである。今日の利権集団としての階級が、民族内部または民族間において、社会関係の大きな部分を占めているのである。それは階級構造(Klassenstruktur)が社会構造の實質的内容として存在し、階級支配(Klassenherrschaft)を基調とした階級国家(Klassenstaat)あるいは階級社会(Klassengesellschaft)が現象的に発現しているという事実として認識される。そしてこのような階級社会においては、階級心理(Klassenpsychologie)を深層として、そのうえに形成される階級利害(Klasseninteresse)を反映した階級意識(Klassenbewußtsein)のもとに階級組織(Klassenorganisation)が形成され、それが即時的階級から対自的階級へと成長・発展するに伴って、階級行動(Klassenhandeln)が次第にその

形態においてとられ、それが極点に達すると階級闘争 (Klassenkampf) となる。このような現象が今日においては世界的潮流となっている。しかし、これが不変的で恒久的なものであるとは断言できない。それはむしろ永遠の歴史の流れの中に現出した一時の歴史的所産であり、過渡的な一現象として理解する方が少なくとも当をえているであろう。

このような事実としての階級社会においては、「民族または民族的社会と階級との関係は、数階級が相互に支配・被支配との対立関係において一つの民族を構成している関係である。言いかえれば、民族と階級とが対立しているのではなくて、支配する階級と支配される階級とが、互いに一民族の中で対立しながら統一されているという関係である」<sup>②⑤</sup>と言えるであろう。階級対立が民族社会の経済関係における生産的分業に基づいて存在し、民族社会が相対立するいくつかの階級利益的社会により構成せられていても、それは国家、より精確には国家的全体を体现すべく意味づけられた事実人および集団によって統制され、統一されているのである。しかしこの統制や統一は、それが一連の意図的な操作によって導かれたものであるがゆえに、多分に擬制的・相対的なものであることも否定できない。

②⑤ 田畑忍、前掲書、七二～七三頁。

## 九 土地・領土

今までは、民族を主に国家との関連において若干の考察を試みてきたのであるが、これで不十分ながら民族の国家との関連においても意義について一応の言及がなされたかと思う。次に国家存立のもう一つの前提要件である土地(領土)について若干言及しておきたい。

国家存立の前提要件としての民族と土地



土地（領土）は一般に国民や主権とともに国家の三要素の一つに数えられているが、それは国家にとつていかなる意味をもっているものであろうか。もとより領土（Staatsgebiet）は国民と不可分離な關係にあり、「それは、国家の有形的物質的基礎であつて、同時に国家權力の行使される空間的境界である」<sup>26</sup>。確かに国家という統一体は、その共通性として地理的空間をもつていて、空間協同体が国家的統一の主要な要件として挙げられるが、それは国家という統一体のもつ固有の法則性の一つにすぎない。しかし、これなくしては国家の存立は考えられないがゆゑに極めて重要な基礎要件である。それが地理的に離れた空間に分かれていくかどうかという問題は、国家的統一にある程度の影響を与えるであろうが、領土が地理的に分散している諸空間から成り立つ国家でも、空間の凝集機能は今日においても十分に確証されうる。しかしその場合でも、国家的集團そのものが土地に定着することを暗黙の前提としている。したがつて、「ある領域に普遍的な決断および活動の統一体としての国家の存在が土地の運命共同体に基づく」ということから、「国家は、統一的空間か、あるいはまた地理的に離れた諸空間において統一的に支配する限りでのみ、領土統一体である」<sup>27</sup>と言える。言葉をかえていえば、領土は土地を必要条件とし、統治権及び統治行為を十分条件として成立したものであつて、この意味からすれば、領土は国法秩序および事実としての領土そのもののいわば『空間的妥当領域』（der räumliche Geltungsbereich）であると言える。

しかし實際は、「領土は法的政治的社會団体たる国家の最高實力性の相互限界によつて決定される」<sup>28</sup>のであつて、究極的には「國家的個体の政治的境界は、決定的に自然によつて引かれるものでは決してなく、國家的行為によつて規定されるのである」から「政治的境界のすべては、『恣意的』『人為的』な、すなわち、境界設定者の權力關係と意思表示に起因する、人間によつて意欲された、境界帯と境界線である」<sup>29</sup>と言える。この意味においては、領土は國際法的・政治的に解釈されねばならぬことになる。

通常、国家は一定の地縁的枠につながれ、この枠の内側において国家としての権限と責任とをもつのであるが、今日ではその範囲が国際関係にまで拡大してきている。「一方では、国内的な次元において、領土は国家の権力を強化するのであって、国家に統制の基盤を、強制のための支点を与える。」<sup>②⑥</sup>「他方では、国外的な次元では、領土が国家に、侵略をもちこたえることを許す防衛基盤を与える。」だが今日の多極的構造の国際情勢においては、国内的にであれ、国外的にであれ、国家間の相互作用によって、純粹には前述のごとき意義をもちえないということも指摘しておかなければならないであろう。国家の「領土権」、より精確には「領域権」は、その内容においても、目的においても何らかの程度の制限を受けているのである。しかし一方では、このような情勢にあればこそ、かえって国民は領土への愛着、すなわち「領土愛」を高めていくのであるとも言える。

民族と土地、これは国家の实在を基礎する最も基本的な生活共同関係である。つまり、「民族と国土とを綜合したものが、国家の真の基盤社会を形成する」<sup>②⑦</sup>のである。この意味から、民族（国民）・土地（領土）は實在体としての国家の存立の前提要件であると結論づけることができるだろう。

②⑥ 伊藤勲著『新講政治学』成文堂、一九六八年、一〇二頁。

②⑦ H・ヘラー、前掲書、二一六頁。

②⑧ 尾高朝雄著『国家構造論』岩波書店、一九三六年、二五九頁。

②⑨ H・ヘラー、前掲書、二一七頁。

②⑩ J・ダバン、前掲書、五四頁。

②⑪ 尾高朝雄、前掲書、三一九頁。